

はしがき

本報告書は、当研究所が令和2～4年度外交・安全保障調査研究事業（発展型総合事業）「大国間競争の時代の日本の安全保障」のサブ・プロジェクトの1つとして実施している研究会「『大国間競争の時代』の朝鮮半島と秩序の行方」の3年目の研究成果を取りまとめたものです。

2022年の世界情勢は大国同士の角逐の様相を一層強め、特にロシアのウクライナ侵略、台湾情勢の緊迫化を受けて、大国はもとより各国が、変動する世界情勢の中での新たな秩序と、自らの立ち位置を探るべく模索する動きを強めています。朝鮮半島も例外ではありません。日本にとって、隣接する朝鮮半島地域の動向を冷静かつ正確に読み解くことは、現在と将来を見据えた外交政策を展開し、世界情勢に能動的に対処する上で重要であることは言うまでもありませんが、秩序の変動期といえる現下の状況において、その重要性はさらに高まっているといえます。

本プロジェクトは発足以来、このような問題意識に基づき、韓国・北朝鮮の内政・経済・外交・安全保障（軍事）の各分野での情勢分析を通じて、日本の外交・安全保障を考える上で重要な要素となる朝鮮半島の現状を把握し、政策的示唆を引き出すための活動を行ってきました。本研究会の活動の成果としての本報告書に収められた政策提言ならびに各論考が、「国際情勢の中の朝鮮半島」の現状を浮かび上がらせ、日本の外交政策に貢献することを願ってやみません。

なお、本報告書内で表明されている見解はすべて個人のものであり、当研究所の意見を代表するものではありません。本報告書に収録された各論考の内容はすべて執筆者の個人的見解に基づくものです。また政策提言はメンバー全体での議論を総括したものですが、各メンバーは完全に個人として議論に参加しており、その内容は当研究所およびメンバーの所属機関の見解を代表するものではない点を付記します。

最後に、本研究に真摯に取り組まれ、報告書の作成にご尽力いただいた小此木政夫主査及び研究会委員各位、ならびにその過程でご協力いただいた関係各位に対し、改めて深甚なる謝意を表します。

令和5年3月

公益財団法人 日本国際問題研究所
理事長 佐々江 賢一郎

研究体制

主 査：	小此木政夫	慶應義塾大学名誉教授
副 査：	倉田 秀也	防衛大学校人文社会科学群国際関係学科教授／ 日本国際問題研究所客員研究員
委 員：	安倍 誠	日本貿易振興機構アジア経済研究所新領域研究センター上席主任調査研究員
	伊豆見 元	東京国際大学国際戦略研究所教授
	奥藪 秀樹	静岡県立大学大学院国際関係学研究科教授
	阪田 恭代	神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部教授
	西野 純也	慶應義塾大学法学部政治学科教授
	箱田 哲也	朝日新聞論説委員
	平井 久志	慶南大学校極東問題研究所招聘研究委員／ 共同通信客員論説委員
	平岩 俊司	南山大学総合政策学部教授
	三村 光弘	環日本海経済研究所調査研究部主任研究員
	渡邊 武	防衛省防衛研究所主任研究官

(敬称略、五十音順)

委員兼幹事：	市川 とみ子	日本国際問題研究所	所長
	尾崎 壮太郎	日本国際問題研究所	研究調整部長
	飯村 友紀	日本国際問題研究所	研究員
担当助手：	園田 弥生	日本国際問題研究所	研究助手
	大山 美幸	日本国際問題研究所	研究助手

目 次

各章の要旨	……………1
政策提言	……………7
第1章 朝鮮労働党第8回大会「戦略的課題」と核使用原則 ——「対兵力攻撃」の概念と「報復」と「先制」の比重	倉田 秀也…………… 11
第2章 金正恩体制10年、唯一的領導體系の確立と核武装の 不可逆化 北朝鮮2022年の内政	平井 久志…………… 27
第3章 ウクライナ情勢と中国・朝鮮半島関係 ——東アジアの構造的変容の可能性と北朝鮮の国防力強化	平岩 俊司…………… 77
第4章 2022年の北朝鮮経済（総合）	三村 光弘…………… 87
第5章 韓国政治の分断と日韓関係の隘路 ——理念対立と歴史観の相克	奥蘭 秀樹……………103
第6章 尹錫悦新政権による政策転換と国際経済の 不安定化への対応 ——2022年の韓国経済	安倍 誠……………117
第7章 政治的分裂のもとでの国防と安保 ——ポスト文在寅における課題	渡邊 武……………127
第8章 不安抱えつつも歯車が動き出した日韓外交	箱田 哲也……………143
第9章 インド太平洋時代の日米韓安全保障協力 ～プノンペン「三か国パートナーシップ」声明と今後の課題	阪田 恭代……………155
第10章 金正恩体制期における「社会主義建設の 全面的発展」の方法論 — 表徴としての「農村革命綱領」の事例分析 —	飯村 友紀……………167